

新福 祐子

(ノートルダム清心女大)

目的 大学教育の中の環境学は、大学の学部・学科・専攻・コースにおいて個別学問領域をこえた共通の研究テーマとなっている。環境に対する諸学による総合性を考えるため、各学問領域で取組まれている環境学の内容を調べ、学体系の方向を探ることを目的とした。

方法 わが国における国公立大学の平成7年度のカリキュラム分析から、専門領域別環境学の内容を調べ、比較検討した。

結果 カリキュラム改善の過程で、各学問領域から構想した「環境」というフィールドは共通の課題を与えてくれるものである。しかし、母体となる学問との関係を強くもつ現時点での環境学は、相互の壁は破れない状態のまま名称だけが総合的イメージを先行させている。「自然と人間共生のための建築学立場からアプローチする環境学」「生物や自然生態を基調にした理学・工学領域と社会科学の領域を融合させようとする環境学」「快適な生活環境を創造するため被服学・住居学を統合した生活環境学」「名称のみに環境学をつけているもの」などがある。新しい学問体系を構築するための「環境学原論」は、諸学問の共通性をふまえた上で解明されなければならないのであるが、これも各領域の範囲内に位置づけられているのが現状である。

まとめ 個別環境要因の評価を総合的評価に発展させる方向性が提案* されているが、個別学問の合意による環境学の構築が不可欠と考える。

* 第19回人間・生活環境シンポジウムにおいて、京都府立大学教授松原斎樹氏による。